

オイラー=ラグランジュの運動方程式について

しん

December 16, 2025

はじめに

本稿の目的は格子 QCD を再現するために、学んでいくものの一つとして、ラグランジアンというものに触れたが、それ自身の中核をなすオイラー=ラグランジュの運動方程式を理解していなかったため、その導出をすることである。

1 汎函数

汎函数とは関数空間 C^n から 0 階テンソルに対する写像として定義される

$$S[u] : C^n \rightarrow \mathbb{C} \text{ or } \mathbb{R}$$

note: 関数を引数にとって、数値を返す関数全般のこと

汎函数の微分は以下のように定義される

$$\begin{aligned}\delta S[u; h] &:= \lim_{\epsilon \rightarrow 0} \frac{S[u + \epsilon h] - S[u]}{\epsilon} \\ &= \frac{d}{d\epsilon} S[u + \epsilon h] \Big|_{\epsilon=0}\end{aligned}$$

ここで用いられる $\lim_{\epsilon \rightarrow 0} \frac{S[u + \epsilon h] - S[u]}{\epsilon}$ は、方向微分のエッセンスでできていて、Gâteau 微分(ガトー微分)を用いている。

note: 関数空間などの、多次元空間の微分について考える時、従来の全微分や偏微分について考えることが難しい(無限回の操作や無限個の定数が必要になる)。そのため、ガトー微分では、ある特定の方向への変化に注目し、その方向を含む平面(2次元グラフ)における微分を考えることで、この問題を回避している。

2 EL-equation

作用汎函数 S と、その関数 \mathcal{L} は以下のように定義される

$$S[\mathcal{L}] : \mathbb{C}^n \rightarrow \mathbb{C} \quad (n \geq 1)$$

$$\begin{aligned} \mathcal{L} : \mathbb{R}^f \times \mathbb{R}^{fd} \times \mathbb{R}^d &\rightarrow \mathbb{R} \\ (v_i, m_{i,\mu}, x) &\mapsto \mathcal{L}(v_i, m_{i,\mu}, x) \end{aligned}$$

最小作用の原理によって以下の式が与えられる。

$$S[\mathcal{L}] = \int_{\Omega} \mathcal{L}(u, \partial u, x) dx$$

EL 方程式とは適当な境界条件の下で汎関数の停留条件 $\delta S[u] = 0$ から導かれる方程式である。

停留条件を満たす解を $u = \bar{u}(x)$ とおく、積分領域 Ω の境界 $\partial\Omega$ でのみ 0 となる $\eta(x)$ を定義する。

$$\eta(x) = 0 \quad (x \in \partial\Omega),$$

この時、停留条件は $S[u_\epsilon]$ が ϵ について極値をとることと同値であり、以下のように表される。

$$\begin{aligned} \frac{d}{d\epsilon} S[u_\epsilon; \eta] &= \frac{d}{d\epsilon} S[\bar{u}(x) + \epsilon\eta(x)] \Big|_{\epsilon=0} \\ &= 0 \end{aligned}$$

$\eta(x)$ は Ω の内部で任意の滑らかな関数とする。

u を微小変化させた関数 $u_\epsilon(x)$ は以下のように定義される。

$$u_\epsilon(x) = \bar{u}(x) + \epsilon\eta(x)$$

実際に $\frac{d}{d\epsilon} S[u_\epsilon; \eta]$ の微分を連鎖率を用いて計算する。

$$\begin{aligned} \frac{d}{d\epsilon} S[u_\epsilon; \eta] &= \frac{d}{d\epsilon} \int_{\Omega} \mathcal{L}(u_\epsilon(x), \partial u_\epsilon(x), x) dx \Big|_{\epsilon=0} \\ &= \frac{d}{d\epsilon} \int_{\Omega} \mathcal{L}(\bar{u} + \epsilon\eta(x), \partial\bar{u} + \epsilon\partial\eta(x), x) dx \Big|_{\epsilon=0} \\ &= \int_{\Omega} \left\{ \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial v_i}(u_\epsilon, \partial u_\epsilon, x) \eta_i(x) + \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial m_{i,\mu}} \frac{\partial \eta_i}{\partial x^\mu} \right\} dx \Big|_{\epsilon=0} \\ &= 0 \end{aligned}$$

$\eta_i(x)$ は境界で 0 になるので、 $\eta_i(x)$ で括り出すために第二項で部分積分を行う。

note: これするともう片方の項に微分を押し付けられるから便利

$$A_{i,\mu}(x) := \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial m_{i,\mu}}(u_\epsilon, \partial u_\epsilon, x)$$

$$\partial_\mu := \frac{\partial}{\partial x^\mu}$$

$$\begin{aligned} \int_{\Omega} A_{i,\mu}(x) \partial_\mu \eta_i(x) dx &= [A_{i,\mu}(x) \eta_i(x)]_{\partial\Omega} - \int_{\Omega} \eta_i(x) \partial_\mu A_{i,\mu}(x) dx \\ &= 0 - \int_{\Omega} \eta_i(x) \frac{\partial}{\partial x^\mu} \left(\frac{\partial \mathcal{L}}{\partial m_{i,\mu}}(u_\epsilon, \partial u_\epsilon, x) \right) dx \\ &= - \int_{\Omega} \eta_i(x) \frac{\partial}{\partial x^\mu} \left(\frac{\partial \mathcal{L}}{\partial m_{i,\mu}}(u_\epsilon, \partial u_\epsilon, x) \right) dx \end{aligned}$$

よって、 $\frac{d}{d\epsilon} S[u_\epsilon; \eta]$ は以下のように表される。

$$\begin{aligned} \frac{d}{d\epsilon} S[u_\epsilon; \eta] &= \int_{\Omega} \eta_i(x) \left\{ \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial v_i}(u_\epsilon, \partial u_\epsilon, x) - \frac{\partial}{\partial x^\mu} \left(\frac{\partial \mathcal{L}}{\partial m_{i,\mu}}(u_\epsilon, \partial u_\epsilon, x) \right) \right\} dx \\ &= 0 \end{aligned}$$

今まで $\eta_i(x)$ を境界で 0 になる関数として定義して進めてきたが、本来は任意の関数である。よって、上式が任意の $\eta_i(x)$ であっても成り立つためには、 $\{\cdot\}$ が 0 であることを示せばよい。

以上より、オイラー=ラグランジュの運動方程式は以下のように表される。

$$\frac{\partial \mathcal{L}}{\partial v_i}(u(x), \partial u(x), x) - \frac{\partial}{\partial x^\mu} \left(\frac{\partial \mathcal{L}}{\partial m_{i,\mu}}(u(x), \partial u(x), x) \right) = 0$$

引数を省略して、以下のように表されることが多い。

$$\frac{\partial \mathcal{L}}{\partial u_i} - \frac{\partial}{\partial x^\mu} \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial (\partial_\mu u_i)} = 0$$